

座談会

四十
年の
軌跡



座談会

40年の軌跡

とき——平成20年4月3日

ところ——ホテルニュー長崎

進行——井原東洋一

出席者——中村キクヨ
(順不同)

辻原津田子
山川米雄
永元安男
坂口悟

長崎県被爆者手帳友の会会長

本部副会長

本部会計監査



辻原 津田子



井原 東洋一



坂口 悟



山川 米雄



中村 キクヨ



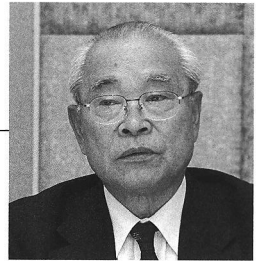
永元 安男

井原 今日はお忙しいなか遠いところからお運びいただきありがとうございます。

被爆者手帳友の会が結成され、六月十八日で四十一年目を迎えます。その十年ほど前に結成された長崎県動員学徒犠牲者の会、これは十一月で五十一年目を迎えることとなります。皆さん被爆されてから、この組織を立ち上げられる、そして今日まで、生活などなど、いろんな苦勞も多かったことだろうと思います。

友の会では、今年その四十周年、五十周年を記念いたしましたして、皆さんの証言をまとめて証言集を発行しようと準備を進めています。その中に、ぜひ犠牲者の会の代表の方、被爆者の代表の方にお話を頂き、六十三年経ってなお、今も残っている被爆の苦しみや、あるいは求めている平和に對しまして、私達の思いを記録に残しておきたいと、そういう思いで今日は、皆さんにご出席いただいたわけです。

ひとつつゆっくりした気持ちで当時のことを思い出し、そして、その後の生活、現在の心境などを含めて、自由に語っていただければと思っております。



ます。長崎の人は長崎弁、大村の人は大村弁で、自由に話していただきたいと思っております。

被爆した当時の状況、場所とか、その時の年齢とか、それから周りがどういう状況だったかとか、それから爆弾が落とされてから落ち着くまでの間の状況、被爆したときの状況、あるいは病気になるったりとか怪我をされた方もあります。またご家族の動静、亡くなった方もあります。その後亡くなった方もあります。そういう動静。それから被爆した後の生活ですね。非常に差別に苦しんだり、就職も結婚も難しいという状況もありました。あるいは生活にも困って貧乏のどん底に落とし込まれたという人もありました。そういう被爆後の生活の状況ですね。そして現在の健康状態あるいは不安、そして私達なんとして二度と再び原爆を落とさせてはならないという世界平和のために努力していかなくてはならないという責務を持っておりますので、そういうことを含めまして、思いのままに語っていただきたいなと思っております。

被爆当時の状況

永元 昭和四年四月三日生まれ、永元安男でございます。よろしくお願ひします。

私は、怪我ですね。防空壕掘りに行って落盤で、頭を十三針とか、腕、足は切断、そこで動員学徒犠牲者の会に申請させていただきました。原爆の時は、ちょうど三・五キロの飽ノ浦病院にいたものですから、なんとか逃れたのですが、その状況は、瓦が十枚ばかりずつとか、五枚ばかりずつとか、重なっていたですよ。その時私は寮母さんの部屋におりまして、光がして、ケガして片足だから片足でドアを開けて飛び出した時は、もう爆風で約四〜五メートルぐらいは吹き飛ばされて、それで第一中隊の玄関の大きな黒板が、体に落ちてきて、それでも怪我というほどの怪我は、その時はありませんでした。

井原 片足は前の落盤事故で失ったわけですね。

永元 防空壕掘りに行ってくださいということ、組長の命令ですね。朝行つたときに、いろいろ係りがあり今日は粹入れとか、今日は掘つてくだ

さいとか命令があるわけです。十六歳ぐらいでしたが粹入れ作業中だったと子供ながらに覚えております。

井原 その時の所属はどこだったんですか？

永元 三菱の中の組立工場です。今考えると、ちょうどお寺の下を掘ってるんですね。お寺の井戸を掘り当てて水責めにあつて怪我した時の記憶があります。

坂口 私は坂口悟です。大正十四年三月二十三日生まれ。

私は長崎市茂里町の三菱重工業の魚雷工場に勤めておりました。潜水艦に積む魚雷の組立工場でした。私はちょうど二十歳だったので徴兵検査を受け工兵隊で甲種合格でした。召集令状には、あなたは「別命する」と書いとつたのです。私は工兵隊で甲種合格でしたけれども、魚雷工場にずっと勤めておつたわけです。人手不足で、女学生とか男性の中学生とか、たくさん私どもの工場に入つたのです。それを私が指導して、部品を学生に掃除させよつたのです。部品を全部バラして、もうて、それをまた組み立てて、会社で検査して、

一応馬力試験をして合格したら、大草の実験場に持って行って、海の中で実験ばしよったとです。昔は人間が乗って、魚雷を敵の軍艦にぶつけて沈没させよった。私どもの時代の魚雷は、人間は乗らずに発射する。私は潜水艦に積む魚雷やったですけんね。工場は大橋にもありました。大橋は飛行機に積む魚雷でした。

昭和二十年の八月九日に原爆が落ちた。その時は十二時頃腹が減ってね、一生懸命作業しよったとです。その工場は一階が組み立て工場で、二階が仕上げやったとです。建物も鉄筋コンクリートやったですもんね。その当時は丈夫な建物やったですよ。それが原爆が落ちて倒れとつとですたいね、爆風で。それで、私は下やったもんですから、自分たちが一生懸命組み立てをしよったところにパイスタが合ったもんで、その下に倒れとつとですたい。原爆が落ちた時は意識不明やったです。それから、見当で約十分ぐらい経ってから意識が戻ってきたですもんね。少しづつ明るくなつてきて、薄暗い会社の中の様子が覚えてきた。そうこうするうちに、従業員が、あっちからもこっちか



らも「助けてくれ、助けてくれ」て、叫びよったですもんね。これは私も何とかして親戚のところに行かんばならんと思つて、西坂におばさんがおつたもんですから、そこまで何とかして辿り着かんば、父親にも連絡も取れんしね。それで一生懸命に工場をくぐつて出て電車通りに入ったところが、電車も、その当時は馬車が多かつたですが、馬も、なんも倒れて哀れなもんやったです。それで西坂に行く途中、銭座町に防空壕がありました。朝、出勤するときはアメリカ兵が二百名ばかり、その防空壕を掘らせられよったです。その人達もみんな倒れていました。

井原 その防空壕というのは聖福寺のところの井樋ノ口のところでしょう。

坂口 ええ、そうです。私の下宿屋が銭座町にあつたものですから、銭座町で何とかして品物ば、洋服やら取りに行かんばならんて、頭から離れんやったもんですけんそこへ行つたところが、燃えてしもうて……。そこである人から防空壕に入りなさいて言われて、銭座町の防空壕に入ったとです。私は行く途中に、私のズボンも作業服も燃えてし

もうて、バンドとパンツだけ残ってですね。防空壕の中では、次から次に亡くなる人が私の目の前にもおるもんですけん、ここにはおられんということ、何とかして西坂町によく辿り着いて、おばさんのところに行つたとです。

そうしたところが、おばさんの家の二人の娘が死んで、担架で運ばれてきたもんですから、おばさんの家のすぐ下の辻さんというところに宿ば借りて、その娘さんが看護婦でしたので、そこで応急手当ばしてもろうて、二日ほどそこにお世話になりました。それからすぐ兵隊さんが来て、担架で勝山の小学校に運ばれました。そして、それから一週間近くおつたでしょう。そうするうちに、私は五島出身やつたもんですけん、十日目ごろに五島からお父さんが連れに来ました。おかげで家に帰って、五島の病院に入つたけれども、なかなか治らん。体が半分焼けとるでしょう。それでいくら治療をしても汁がダラダラ出るとですよ、傷が深かもんですから。それで荒川温泉に治療に行きました。そこに何か月も入ってな。そしたら汁がカラツとなって汁が出んことになって、そこで

ようやく体が快復して、一年ばかり病院生活をしておりました。

井原 運び込まれたのは勝山小学校だったですか、新興善じゃなくて勝山ですか。

坂口 はい、勝山です。勝山で治療しておつたときに、治療してくれた男の人が「もうもてん」と言うて窓から飛び降りて死んだとです。私は動ききらんじやつたですけれども、隣の人からそんなに聞きました。治療する人もそうやつたかもしれんが、私ももてんじやつたですもんね、痛くて生きておるのが辛らくてね。そんな人もおつたです。自殺しとるとです。そんな状態で、私もお父さんから船で連れに来てもらって、ようよう治療が出来たとです。

井原 じゃあ、辻原さん。

住吉トシネル工場

辻原 私は辻原津田子と申します。被爆当時の身分と言えば、今だったら中学ですけど、大浦国民

学校二年生に在学中でした。現在は大浦中学になってます。その学校ができたばかりで、まだ開拓途中で運動場もできてなかったんですよ、それで、授業は毎日一時間あるかないかで、給食なんか無く、弁当も家から芋を持ってくるとか、無ければ友達のを半分もらって食べる、そんな状態で、とにかく運動場づくりで毎日、開墾、開墾、開墾だったんですよ。そういった最中に、軍事がかく兵器工場に学徒動員という命令が下って、行ったのが十三歳です。大浦国民学校からそのまま三菱兵器製作所、今の長崎大学本部になっています。その三菱兵器製作所の機具工場の永渕組というところに配属されました。仕事と言えば、先ほど話されていた魚雷の部品をヤスリで磨いて、さらにその上をペーパーで磨く仕上げの方の仕事をさせられていました。そして毎日のように一日おきとか、一日に二人とか、また三〜四日経てばまた一人というふうで、徴用徴用で兵隊に取られて出征していくんですよね。「勝ってくるぞと勇ましく…」というふうに、みんな外に出て出征兵

士を送るんですよ、涙ながらにして。そういった毎日でした。そして、だんだん戦争が厳しくなると、本土が襲撃されるようになって、住吉のトンネル工場へ移転しました。私たちの治工具工場は、三菱兵器の六号トンネルに、機械もろとも学校の先生も一緒に引率されて行っただんです。当時の住まいは南山手の二十八番で国宝の大浦天主堂のすぐ隣です。弁天橋から電車に乗り、千馬町で乗り換えて、大橋からずっと今の大学本部まで歩きます。救急袋に防空頭巾。そうするうちに毎日のように敵機は来る、警戒警報、空襲警報、もちろん端っこのほうに防空壕がいくつか掘ってありました。土饅頭みたいに掘って、上に草を生やして分らないようにしてはありましたけれど、そこに、「警戒警報」と聞いたらわーとそこに行くけれども、間に合わないですよ、すぐに次には空襲警報だったから。これじゃいかんということで、今度は住吉のトンネル工場のほうに移転ということになった時は、たぶん梅雨頃ではなかったでしょうが、ものすごく雨が降るときでした。それですごく降る雨の中を、それぞれの部品を男の人

達が持つて、私達は救急袋を持つて、六号トンネルに入りました。一号から四号までは貫通はしていませんけど、五号と六号はまだ貫通してなくて、朝鮮の人が、手鑿で掘って、ある程度小さい穴を掘って、そこにダイナマイトを埋めるんですよ。何か所か埋めて、そしてそれに火を点ける、導火線に点ける前にちよつと後ろに下がれと言ったり、工事中でした。一号から六号まで横穴が通つていたんですよ、連絡網のために。表まで行かなくて、横穴をジグザグに。もちろん学校の先生も一緒に来て出席も取っておりました。先生は森野千種先生といって女の先生でした。毎日部品をヤスリで磨き、ペーパーで磨き、製品を作っていたんですよ。そしてらいよいよ原爆の当日。強い爆風と共に、どうしてどうなったのか、まったく分かりません。とにかく強い爆風で飛ばされたんですよ。それで失神したんです。私があてがわれていたのは四尺旋盤でした。話が前後しますが、兵器のトンネル工場に行く前に、永渕組から松尾組に移り、松尾組からトンネル工場に移ったんです。私達が入った六号と五号がまだ貫通しておらず、ボトンボト



ンと水が落ちてくるんですよ。そして警戒警報、空襲警報だと言う時には、その旋盤の下に隠れる、岩肌に貼り付く、そんなふうな中で、八月九日を迎えました。八月九日を迎えたというよりも、何でそうなったのか、とにかく吹きつけられて、失神して、しばらくは、さつき言われたように何分間かどのくらい分かりません。踏まれて、自分の体の痛みというもので意識が戻ったんですね。それで見たら真つ暗闇なんです。「生きておるものは逃げる」「一号トンネルに集結せよ」と言われ、一号から六号までの間に、表に出なくても横穴がずつと開いていたので手を繋ぎながら、ずつと蟹の横ばいのように、とほとほと、とほとほと、ずつと引かれながら、そうしながら歩きました。そして一号トンネルに集結して、ちよつと外を見たら、それは外はいい天気でした。暫くそこにて、そしてたら敵機はずつと旋回して、きつと被爆の状況を撮影しているんですよ。爆音がしたら「伏せろ」と言って伏せる。草むらに、木の陰に、また壕の中に伏せて、そしてちよつと爆音が遠のいたらトンネルを出て、下の道に降りて、前

に汽車の線路がありましたので、その土手を上つて、汽車の線路を踏み越えて向こうの山に逃げろという命令が下ったんですよ。それでみんな下の者も年寄りも、女子挺身隊も学徒動員もない、みんな生きている者が手を繋ぎあいながら、その土手を上り、線路を踏み越え、土手を降りて、向こうの山に、竹藪に逃げました。そうするうちにも爆音はするは、ピカッ、ピカッとそれは写真を撮っていたのか、そして夕方まで、そこでじっと身を潜めておりました。そうしたところが、夕方もうほとんど日暮れ近くになって伝令が来て、元の一号トンネルに集結しろということで、また手を繋ぎながら、薄い暗闇の中を、夏ですからそんなに早く日は暮れませんよね、手を繋ぎながら一号トンネルに集結して、トンネルの丸くなっている壁に、みんなくっ付きあいながら…。五島からも学徒動員で来ていました。福江からも来ていました。富江から来ていた立花節子。福江から来ていたのは鈴木澄子。一緒に組の松尾組に配属されていたものだし、歳も一緒だから、「トミちゃん、スミちゃん」と言いながら、いつも手を握りあい泣き

ながら配給の黒パンを分け合って食べたこともあります。田舎の言葉で「トミちゃん、おっだんどげんなろうか。かあちゃんは死んどるか生きとるか。おっだ、かあちゃんに会いたかよ、とうちゃんに会いたかよ」そう言つて、泣きながら手を握り締めるんです。とうとう朝出るときに食べたつきり、昼も夜も、翌日の朝も食はず、しかし、ひもじいとは感覚がなかったんですね。ただ両親は家は大丈夫だろうか、家族は、そしてこのまま生きて帰れるのだろうか。そうしながら一号トンネルの壁にくっ付いたまま、手を握りあつて、飲まず食わずでも、そうしているうちに、物を言わぬようになつたから、ぐたーとしなだれ掛かつて来るんですよ。でも死んだとは感覚がないんですね。あく具合が悪いだろうか、なんだろうか。実は死んでいるんですよ、亡くなっているんですよ。でも怖いとか、そういう感覚は全然なかったですね。ずっとその晩そこにおりました、一号トンネルの中に。被爆したのは六号トンネルです。

井原 仲間が亡くなったのは、なにか傷を負って
いましたか。

辻原 組長がまだ十一時頃なのに、「橘、弁当ば取りに行つて来い」、学徒動員の私達に「今日はお前が取りに行け」というふうでトンネルの外に出ているんですね。帰つて来ませんでした。

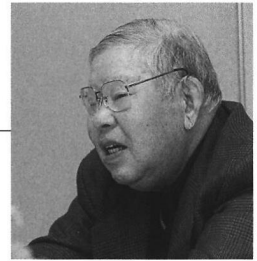
山川 私は昭和三年四月三十日生まれ、山川米雄です。私は昭和二十年の初めから話をさせていただきます。

私の兄、三男坊の三郎というのが二十二歳でビルマにおいて戦死をいたしております。そして次男の山川正雄というのが、インドネシアのジャワ島で、その戦地でマラリア病に罹つて、それから家に帰され、家で療養しておりましたけれど、二十八歳で病死しております。これも全部戦争のせいです。

私は十五歳の時、三菱の長崎工業青年学校というところに入りました。そして半年間、実習場で実習をしまして、半年後に現場に配属になり、現場は今の長崎大学の所にあつた三菱兵器航空魚雷製作所です。そこに入つて作業をしておりましたが、空襲で機械をやられるのが会社にとっては重大な損失になりますので、住吉に、現在の赤追で

すが、そこにトンネル工場を掘つて移動をいたしました。そこに移動してから半年ぐらいしてからですかね、よく分かりませんが、トンネルの中で、私は四尺旋盤、一メートル四十ぐらいですかね、四尺旋盤で航空魚雷の部品のネジ切り作業をしておりました。そろそろ後どれくらいかで昼飯だなど思つて、そのころは昼ご飯とかご飯を食べることしか楽しみがなかったから、そう思っているうちに、今まで遭つたことのないような暴風がトンネル工場に入つてきました、その風が通り抜けました。その前に停電をしました。暫くしてから暴風が来たんです。何ごとかと思つとつたら、トンネル工場の前に爆弾の落ちたから、みんな中に入ると事務所の方から大きな声で呼んでいたけれど、中は真つ暗で進んでいけないのです。それでじーっとしていたら、トンネルは機械の振動で屋根から小石が落ちてくる、水滴がするもんだからトタンを張っていたんです。そのトタンが爆風で電線に引っかかりから〜んとして、結構長くトンネルの中におりました。それからみんな山の上に避難しろというので外に出たところ、もう外は地獄その

ものだったですね。怪我人とか、向こうの家はほとんど燃えている。それとトンネル工場の前に旋盤で削った切り屑ですね、それがどんどん燃えているんです。怪我人はおるは、うめき声はするは、空は黒いし、煙で空が暗くなっていた。それで山の上に行ったところが、そこにもう結構怪我人が多く来ていました。途中、赤ちゃんを背負った若い奥さんが登っていきよったですけど、その子供の頭の半分は無かいですね。それを知らずに、もう夢遊病のような格好で登って行きよらすんですよ。そんなものを私達見て、もう精神状態に異常を来しているんですね。助けようという気がないんです。それで山の上に登って住吉方面を見たら、ほとんど燃えよつですもんね。原爆ということとは頭にありませんから、よほど余計に焼夷弾を落としたとばいねと思いなながら見とつたです。大橋工場が大変だから応援に行くと言われて、それで七、八人に分かれて大橋工場に行きました。汽車道を通って行こうとしたら、汽車道の枕木まで燃えていたですね。ちよろちよろ燃えたり燻ったりしている。こつちから下って行くのは私達元気



な者ばかりで、下から道ノ尾方面に上って来る人達は、全部裸とか、足を削られたとか、顔は黒くなって血が滲んでいたのに煤が付いてしまつて黒くなつた人達が、杖をついたり、人の肩にもたれたりして、どんどんどんどん上って来よるんですね。岩屋橋の踏切、その所に行く時分には、もう「水を飲ませろ」「助けてくれ」と言うて、足を引つ張られたりするんですけど、それを払い除けてただ命令に従うだけですね。右往左往しているところと工作部長というたら海軍少佐ぐらいの人が防空壕の中から顔を出して、「飛行機が来たら、この様だから皆すぐに防空壕に避難しろ」という話でした。どこに行つても、死んでいる人しか残っていませんでした。それを二人か四人で運んで、二十人ぐらいの広場にあつめました。一緒にいた同僚が「お前の家に行つて見よう」というので、途中照円寺の下で、手をこう大火傷をした、ベルトだけ腹に残り他の服は燃え尽きてしまつた、朝鮮の人が「バンド外してください」と言うので外そうとしたけれど、もうその人の体が腫れて、ベルトが風船を握り締めたように食い込んでしもうと

るんですよ。それをやっときさ外して、みたら今度はそのベルトに皮ふがてらてらと付いてきて、ベルトは草原に捨てました。家に行ってみたら、家はもう丸焼けだった。家の父親は目がちよつと不自由で、体ももう六十七歳だったから、家に寝とったものですから、父はどげんなったやろかと思つていつてみたら、家の前に川があるんですけど、そのちよつと土手になったところに父はよこたわっていました。爆心地から一キロメートルぐらいの三芳町で田圃の草取りをしておつたお袋と兄嫁は全身火傷をして、帰ってきたようですが、父親も大火傷をしていました。地べたに、寝ていたお袋と兄嫁と二人は、もう見る影も無く、顔も分からんですね、真つ黒になつて、髪の毛も縮れてしもうて。父は大浦からかけつけた姉に任せて、私は母達の所にて明けの日まで過ごしました。まさにケガ人ばかりで、ただ呻き動揺するだけ、痛いとか何とか言いますが、心根が死んで参つてしもうて痛さも何も分からんとですよ。翌日、汽車で移動することになり私はお袋を背負うよな引きずるよな恰好で、姉さんには歩いて

もらい、汽車道まで辿り着いた時には、もう汽車は出た後だった。姉さんは先に歩いていて間に合つたようでした。苦労して道ノ尾まで連れて行つたら、もう道ノ尾にも汽車は来んと言われ、そこで何か油を塗つて貰い、又連れて帰れと言われて、帰っていたら、トンネル工場の前あたりで、偶然に親戚の人たちと出会い、滑石の肥塚酒店に一泊、時津の子々川にまでさまよつた上、お袋は息を引き取つたそうです。姉の方は、大村にいたのを連れて来ましたけれども、十七日に亡くなりました。だから二人とも亡くなって、それで私は戦争で二人、また原爆で、原爆も戦争ですけど、原爆で二人、家は全部焼かれてしまつたんですね。

井原 お父さんはどうなさいましたか。

山川 お父さんは四年後に亡くなりました。それでもう一人長男は、小倉にいましたが、兄貴も入市被爆して、あとで胃ガンで亡くなりました。それで私の家族は原爆で三人、戦地で二人、従兄弟が三人亡くなりました。原爆では私の身内は一家全滅の所もあります。おじさんの家も今の拘置所の横にあつたんですけど、全滅ですね。

太平洋戦争直前の生活

中村 中村キクヨです。大正十三年七月一日に生まれました。私は昭和十七年に学校を卒業いたしました。ちょうど私が女学校を卒業する十七年は、戦争の色は濃くなって日独伊三国同盟とか、そういったことがあり、英語を習っていましたけれども、その英語も、一ページ目の「Spring」という、春という単語だけを教わりまして、英語も廃止になるといった中で十七年に卒業いたしました。軍需工場の川南造船所の総務に、学校から試験を受けて入社いたしました。それから昭和十八年に、当時の総理大臣でありました東条さんが川南の社長になられて、いよいよ私達は軍需工場の中で、鉢巻きを締めながら、頑張りました。うということ、一生懸命働きました。そして十九年はいよいよ戦争もたけなわになりましたが、私のお父さんが、そんなところでいつまで勤めてもキリがないから…と、当時は親の意思で結婚というものが決められた時代でしたから、今は亡くなりました主人が兵役の関係で、北支、中支をずっ

と行って来まして、今帰ってきているので、またいつ召集令状が来るかも分からないから、今のうちに結婚をした方がいいということで、とにかく親の薦めるままに、結婚をいたしましたのが昭和十九年でございました。それから家庭の主婦になりました。いよいよもって戦争の色が濃くなって、そして物資もだんだん乏しくなりました、そして隣組というのが出来て、回覧板とかそういうものが始まりまして、いろいろな通達があり、そういう時代が変わっていきました。

その頃主人も召集を受けまして、博多の方から出港したと聞きましたけれども、博多から出港した船団はほとんどが撃沈されて全然生きてはいないよということ、悲しみに沈んでおりましたけれども、ある日突然、朝鮮の北方から一枚の葉書が来まして、元気でいるということ、安心したような次第でございます。そして主人も、七隻出た船団のうち二隻だけ、自分達が生き残って、サイパンの方に行く予定が、行かれなくなって朝鮮の北方の方に着いたという話を後で知りまして、本当によかったと思っております。それでいよいよ

戦争がたけなわになりまして、私もお腹が大きくなりまして、防空壕に入るようになりましてけれども、私も動けなくなりまして、ちょうど八月九日の原爆が落ちる前の月の、私の誕生日と同じ七月一日に長男が生まれたんです。それでB29が飛んでくる最中に、家で母親から手を握られながらお産をいたしました。お産婆さんを見つめるのに往生して、やっとお産婆さんが見つかって正常な届けを出したという状態の日々でございました。

それでいよいよ原爆が八月九日に落ちる前は、防空壕を出たり入ったりで、物資も不足しながら母が買い出しに行き、私も健康状態が悪くてお乳も出なかったもんですから、配給のミルクを頂きましたけれども、それでは足らなくて、貰い乳をしながら、子どもを育てながら防空壕を入ったり出たりしておりまして、八月九日に原爆が落ちまして、ちょうど洗濯物を干していたときに被爆をいたしました。

当時、被爆をしまして、家の中は本当に惨憺たるものでございまして、五・八キロメートルでございませうけれど、爆風というものはやっぱり強い



ものだなあと思いました。家具もいっさい、障子とかも倒れまして、やっと家の形が残っているという状態でございました。その当時、岩川町に住んでおりました私の叔母とか姪が亡くなりましたので、どうしているかということ、当時父が六十二歳、私と妹がおりましたので、母に私の長男を預けまして、そして稲佐山を登って、長崎駅に行きましたが、その先はどうしても、死人の山とか、電車が黒焦げになり、馬車がひっくり返ったりして散乱状態で、今考えれば駅の先の八千代町にガス会社がありましたから、そこぐらいまで行ったと思いますけれど、それから先は行かれない、父だけが自分だけで行ってくると言っていて、私達はすぐ家の方に帰りました。帰りますと、家の周りに怪我をなさった長崎大学の学生さん達が船で運ばれてきました。というのは、私の家の隣が、大波止にある牟田薬局の別荘がありまして、その方が医学部におられた関係で、小瀬戸に運ばれたということでした。その看病をいたしました、が、何回も申し上げるように、若い人達の最期を看取るというのは、ほんとうに辛く、水を、水

をとという叫び声が未だに耳元から離れません。タオルで絞り上げて何人かの人に水をあげたのが良かったのか悪かったのか、いまだに私も苦慮しておりますけれども、どうせこの方達はもう生きていても長くはないだろうというふうには、自分自身でも良い方に考えるようにしております。

それから先は、とにかく配給の時代に入りました、私はこの配給制度ということに対して、皆さんは戦後のこととしていろいろ話しますけれども、私はこれが一つ言いたくて。配給制度になって、お米は個人で配給所に取りに行きまして、家族の人数にあわせて何キロか頂いておりますけれども、野菜というものは田舎から送られて配給になるのでしょうけれども、その配給をするのに、私達の隣組は十四所帯ございましたけれども、その十四所帯に大根が三本、人参が六本、じゃがいもが三十個ぐらいというようなことで、もろもろ配給がありまして、これをどうして十四軒の一世帯ずつに分けるかということになったら、大根も大きいものあり、小さいのありで、そのときに隣組で中村さんが一番若いから、あんたが計算して、大

根でもごぼうでも分配するようにせろということ、私がいつもそういった役割を仰せつかってしておりますけれども、今度また配分するのに何でも大きいのと小さいのがあって、当時は本当に食べ物には困っておりましたから、みなさん目の色を変えて、どれを取ろうか、大きいのを貰いたい、と言う気持ちでございましたけれども、私はこれはもうくじ引きにしましょうということ、くじ引きをして、皆さんくじで当たった人に順番で、それをもつて帰って貰ったという記憶があります、本当に戦争というものはこうした物資の足りなさ、人間の心の醜さが現れてくるということを痛感いたしました。それ以来は、終戦後のもろもろの機会でアメリカからの配給も頂きましたけれども、生涯戦争というものはしてはならない、これだけは人類の滅亡と同時に、人間の心も荒んでいくと、戦争だけはしてはならないというようなことを、配給を通じて、常に思っております。そして主人もおかげさまで、復員して帰りましたけれども、主人は朝鮮におったから何一つ持ってこなかったけれど、ご近所の方は地元におられて、

山の警護にあたられた方などは、缶詰とか米とかいろいろなものをリュックに積み上げて帰って来られて、同じ戦争に行くならあんたも内地におつてくれればよかつたのにね、と主人とそんな話をしたこともありましたが、そう言った状態で、戦争の恐ろしさ、戦争の苦しさ、そういったものは生涯してはいけないと、私は願っております。

拡大対象地域での被災

井原 私も被爆したんですが、今は東長崎になっていますけれども、西山の峠を越えて、いま中尾のダムが出来ておりますが、あそこは中心地から六・五キロのところになります。私の当時の現住所は田中町の蔭平というところだったんですが、たまたまその時には、私の母と近所の小母さんと三人で薪を取りに行っていたんですね。当時は燃料は主として薪でしたから、山の中に入って落ちている枝を拾ったり、立ち枯れしている木を切ったりして、燃料を調達していたわけですが、私は



昭和十一年三月生まれで、ちょうど九歳でしたから、私が高い木に登って枯れ枝を鉋で落とすという作業をして、下で母親と近所の小母さん達がそれを拾うという状況でした。山の中のいちばん高い木に登っております、ちょうど木陰に入ったときに、ものすごく大きな、太陽の何倍もあるようなものがパーツと光ったんですね。木の陰に隠れていましたけど、「熱っ」というぐらいの光で、びっくりしたと思う間もなく、暴風がきて、私は木から振り落とされたんですね。どうして下りたか、後で聞いたら暫く気絶しておったということでした。お袋は、「とうとう息子は死んでしまった」と思ったら、気絶しとったということでしたけれども、暫くすると、ちょうど正露丸みたいな脂ぎった泥の固まりが、バラバラ、バラバラと落ちてきまして、辺りは真つ暗闇になりました。ほんとに暗くて……。当時、小型爆弾などの話を聞いておったもんだから、それが、ひとつひとつが危ないものじゃないのかなというふうに思って、暫く三人で岩陰に隠れておりました。ところが、朝から行って、昼も帰ってこないということで、小

母さんの息子さんが迎えに来てくれましたして、逃げような形で薪を集め束ねて帰ったんですが、その時に、製鋼所の帳簿、帳票の束なんか、束のまま飛んできてたんですよ。辺りは真つ暗になっ
ている中に、そういうものがひらひら飛んできて、何が起こったのか分かりませんでした。翌日、お袋達は東望にありました車の試験場に向き、婦人会で炊き出しをしておりました。もう、おにぎりを握る暇もないもんですから、ご飯を茶碗についで、塩をバツとかけて、もう一つの茶碗を被せてそれを握っておりました。何処に行く当てもない人達が多かったと思いますけども、ぼろ切れのようになつて歩いていく人達に、次から次に炊き出しをして食べさせておりました。兄は警防団に所属しておりまして、ほとんど毎日、死体を焼却する仕事に携わったようでした。後日頭の毛がバーツと抜けましたね。入市被爆なんですけど、頭の毛が抜けましたですよ。柿の葉を煎じて飲ませたり、いろいろしておりました。お袋も二十二年頃、奇妙な病気に罹って五年間、闘病して亡くなりました。私は六・五キロのところだから、長

く、被爆地域の拡大運動がありましたけれども、昭和五十一年九月の拡大時点には自分は該当してないというふうに思っておったんですね。だから地域が拡大されれば、被爆者の扱いになるのかなあというふうに思っておりました、平成十四年の地域拡大時に申請をしましたところ、「いや、あなたがいたところはすでに第一種健康診断特別区域になつている」と。ところが証明する人が誰もいないわけですね。そしたら、私を迎えに来てくれたおじさん、もう九十七歳なんですけど、この人が自分が手帳を何十年前前に申請するときに、私達の様子を書いてくれたわけですよ。長崎市役所にその資料があつたんですね、何十年前からの書類と付き合わせて、間違いないということになつたんでしょうね。結局、その人の証言で正式な手帳を手にすることができたわけです。だから二十六年間、自分自身が被爆地域に該当していたということを知らないでいたわけです。私自身は血圧が高く、原爆症状ということですが、お袋は昭和二十七年に原因不明で亡くなりました。白血

だから、原爆症というのは、健康にしているように見えながらも、いつ何時、どこで命を奪われるか分からないという、恐れがずっと頭から離れませんね。長崎市の場合とはくに高い山はありませんが、五百メートル上空で炸裂したということであれば、長崎市内全体が中心地みたいなもので、中心地から何キロというようなことを言っていますけれども、いま被爆体験者として差別されてきた人達が声をあげるのは当たり前のことだと思います。南北十三キロ、東西でも六く七キロぐらいの非常に狭い範囲でしか認めてないわけですから。そういうことを是正していかなくてはならないと思っています。

許せない久間発言 天皇の戦争責任と

坂口 久間さんの原爆発言に対して一言いわせて貰えないですか。久間さんが原爆のせいで戦争が止まったと言ったのですたいね。あれには反発を覚



えています。私が思うことは、その時分は、アメリカが上陸してくれば、年寄り子供は全部殺して、若い男は全部金玉を取ってしもうて奴隷みたいに働かせて、女は陵辱して殺したりするとか言うて、だから最後の一兵まで戦えと言ったのですたいね。そう言われて皆、そのつもりで竹槍でも持って、それを聞いたるから沖繩の人は最後まで戦って、最後は女の人は子供を抱いて崖から飛び降りよつたのですたい。あれは東条があんなことを言うからあんなになった。それをどうして私達は何もなしにアメリカの兵隊を上陸させてきたかというのは、私は天皇陛下の一声だと思えます。何でかといえ、天皇陛下の一声は神の一声と思えと教育されてきて、終戦の勅語があつたでしょう、放送があつたでしょう。それを聞いたるから誰も抵抗なしにアメリカ人を受け入れてしもうとるわけですたいね。長崎でも無抵抗で、日本でも全部で相当な死人を出すという覚悟であの人達は上陸して来とつとですけん、やはりあれは天皇陛下の終戦の勅語があつたから、それで日本国民は天皇陛下が言われたんだからということで、反抗無しに終戦を受

け入れとったわけですたいね。それをもっと三年ぐらい、いや三カ月半ぐらい前にその勅語を出してくれれば、沖繩はあんな悲惨な目には遭うとなんのですよ。沖繩も日本本土のごと受け入れとるはずですよ。

井原 天皇の戦争責任で、本島さんが発言したときは、ちょうど天皇が寝たきりの時期だったので、マスコミはすべて自粛してましたね、天皇の病状についても書かなかったんですね。その時に本島さんが天皇に戦争責任があるという主旨の発言をしたので、一斉に飛びついて書いてしまった訳ですね。やはりあなたのご意見のように、天皇のお陰で救われたという考えの人も、天皇のお陰で戦争が長引いたということもあるわけですね。だから天皇も軍部に利用されてきたともいえます。

山川 私は十分利用されたと思うております。

井原 軍がやはり利用したんです。統帥権、統帥権と言って政治的に利用してきたわけですよ。だからそこら辺のことを今の天皇はよく分かっているから、慰霊の旅などに熱心なのだと思います。やはり政治が独走して行くのがおそろしい。

山川 あの時はもっと早く陸軍の東条達が天皇陛下に勅語を出させるようにしとれば、沖繩もあんな悲惨な目には遭うておらんとです。私はそう思うとですよ。

井原 日本の場合は、総玉碎ですからね。陸続きのヨーロッパなんかに行くと、戦争をしている最中に美術品なんかは全部移転させているんですよ。どこかに移転させて置いて、やがては戦争は終わるといって考え方なんです。だからドイツに占領されたフランスだって、それからソビエトなんかもドイツから占領されて九〇〇日、レニングラード、今はサンクトペテルブルクと言いますが、そこでは地下に潜って音楽会がひらかれていたと言うんです。宮殿の美術品を全部移転させてるんですよ。戦争が終わってから、又、もち帰って来ているんですよ。そういう感覚が日本にはなかったですね。寺の梵鐘から何から全部徴収して鉄砲の弾にしまった訳ですから。なんもかも潰してしまった。もともと始めるときから物量について、無謀な戦争だった訳ですね。

山川 あん時でも海軍が、三年か幾らかは持てる

けど、後は責任持てんと言うとるんだから。

井原 山本五十六も反対したでしょう。山本五十六の記念館が新潟県の長岡市にあるんですよ。実は親父は私に五十六という名を付ける筈だったんですよ。親父の五十六歳のときに生まれたんですよ。山本五十六も父親が五十六歳のときに生まれただけですよ。それにあやかって親父も僕に五十六と付けようと思うとったそうです。彼は戦争することに反対してるんですね。

山川 山本五十六みたいな人が長生きしとれば何か違うとつとでしょうけれど。

永元 シンガポールが陥落したときに止めとけば。
山川 東條なんかみてみんですか。人には最期の一步まで戦えと言って我が自殺しようとしとつとですよ。あれが本当の武士道ですか。こめかみに当てるか口の中に入れるかして撃てば確実に死ぬんだから。それが自分が生き延びたかったから失敗した振りをして、裁判の時には松岡から禿頭ばぶたれて恥ずかしいことになった。

井原 あの人が川南造船の社長だったわけですね。
中村 そうです。立派な髭を生やして、もう厳し



かったですよ。いっぱい勲章を付けて毎日軍服姿で朝礼するんですから。その頃はやはり私達も立派な人と思込んでいたから。

教育の大切さ

井原 教育とは恐ろしいもんだと思いますよね。何の矛盾も感じなくなつて……。

中村 今の北朝鮮があんなになるはずですね。私達も小さいときから教育勅語を、一年生に入ったときから、「朕思うに……」つていう勅語をずーとしてきましたからね。天皇陛下はやはり神としてしか崇められなかったですよ。

井原 防空頭巾と血液型を書いた名札を胸に貼り、授業中に先生が突然号令をかけ、「空襲！」と言うたらパーと机の下にかくれる訓練をよくやったりくりかえし訓練してましたね。

永元 私が聞いた範囲では、アメリカは日本の教育が悪いと言ったと聞いたですね。

井原 そりゃそうですね。

永元 天皇陛下のためにという教育が、幼稚園の時から何になりたいというたら、もう兵隊さんやもんな、男は。兵隊には行かないという者はおらんやった。幼稚園の時からそうやった。

中村 戦死した遺族の家には、みんな日の丸をして国のために家の子供が死んだと言うことを：

井原 出征兵士の家と玄関に札がかけられておりましたね。出征兵士の家には百姓でも何でも加勢に行っていましたね。

山川 私が兵器におった時に、トンネル工場に入る前、朝永組というところにおった時、現役兵で戦争に行く人がいまして、それで挨拶をした訳。

その人が「元気で行って帰ってきます」と言うた訳です。だれでもそう言うです。それしたら朝永という組長が「貴様、兵隊に行つて生きて帰つて来るつもりか」と言うて、「言い直せ、帰つて来ると言うな」と。しかし誰でも帰つてきたかですよ。だからみんな家では陰膳を作つて元気で帰つて来てくれると言うてお祈りして、二人行つていたら二つ作りよつたですよ。

井原 まだ私は少年でしたが、召集が来たら、サ

イドカーで赤紙をもつて来よつたですよ、みんな「がつくり」しているのに、「良かった、良かった」と言つてお祝いしてね。それこそ中村さんみたいに今のうちに結婚しとけというような事でした。

中村 そうなんですよ。出征と結婚が一緒というのが多かつたんですから。

井原 「兵隊送り」には、笹に武運長久とか書いたのぼりをもつて行列してお宮まで行き、そこで演説しよつたですね。「ちゃんころを何人殺してきます」とか叫んでいました。そんなしてみんなで一生懸命送り出した、それが当たり前のことだつたんですね。

たとえば今、靖国という映画ができて、その上映をさせないと言う妨害の動きがあり上映できない風潮がある。日教組の大会も裁判所で判決が出ているのにホテルが断るといふ、そういうふうの外圧が来て、それが防げないということになってくると昔のようになってしまふんですよ。それが恐いですね。

さてそれでは、被爆されてから、その後の生活

の状況とか、家族のこととか、そういうことについて、みなさんどういうふうな状態だったか、また順次お話をお聞かせください。

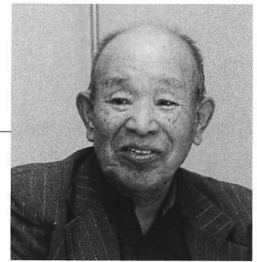
被爆後の状況

永元 みんな詳しく話が上手ですね。私は恥ずかしかつたですがね。私はもともと造船所で、飽ノ浦の陸上クレーンの下の組立工場だったです。防空壕掘りに行って怪我する前は。原爆が落ちた時には、みんな寮生ですから、五島、壱岐、対馬、ほとんど島国からの寄り集まりだったですからほとんどが家に帰省しました。飽の浦寮には、ケガした二人、奄美の人と私、そして沖縄の人が何人か残っておりでしたね。帰れん訳ですたい。それで十人ぐらいご飯は貰うて食べるわけですよ。給料も貰うわけですよ、まだ三菱が解散してないですから。どうせ生き残りじゃから。それで工場に松葉杖で行ったわけですよ。飽ノ浦寮ですから、坂を下って陸上クレーンの下まで。そしたら組長

が一人おるとですもんね。「おう生きとったか。お前はお祝いせんばいけんぞ」こう組長が言うんですね。怪我してお祝いとはおかしい話と言うと、造船所はほとんど怪我人はおらんわけですたい、ガラスでどこか傷を負ったぐらいで、鉄骨でつくった工場が壊れとらんですからね。ガラスが割れたぐらいでしょう。いままで、大沢組が八月八日までずっと陸上クレーンの下で仕事をしよったんですね。海軍さんの舵取り機とスクリューを作りよったわけですたい。それは師範学校の生徒が削りよったわけです。八月九日に、軍の命令か三菱造船所の命令かで、大沢組の十二人は全部移転となり、みんな歩いて浦上に行き、ちょうど原爆の落ちる時間に着いとるわけです。浜口町ですよ。組長は原爆のあと探しに行き十二人遺体が重なつて死んでるのを確認したそうです。組長の設計した車の傍に、数えたら十二人が死亡していて、これは間違いないと言うことで、学校の焼け残った材料で茶毘に付し、自分は骨入れの箱をつくり住所と名前を書いて九九パーセント家に送り届けたと組長は言いましたよ。組長から「お前は帰ら

んで良かとい。給料も出るし三菱で座って出来る仕事があるんだから、帰らんで良かばい」と言われましたが、「一応帰ってみるすばい」と言うたら、そのまま帰すわけにはいかんからと、三年生に、「これは沓岐に連れて帰ってくれんか」と、組長が命令し、汽車賃とか船賃とか出してくれたそうです。当時、十月ぐらいは長崎駅から汽車が通ったんですね。長崎駅から乗るときはそうなかったのが、鳥栖辺りでは兵隊さんが乗られんと言うても窓から入ってくる、海軍と陸軍の喧嘩ですたい、汽車の中では、「海軍が悪かけん負けた」、「陸軍だから負けた」、もう大喧嘩。人間の上人間ですたい。私達の乗った汽車で、屋根に上ってトンネルで振り落とされて死んだとかいう話もききました。

博多を経て、船で芦辺につき、武生水の自宅にようやくたどりつくと、「もう行くな」と、母親が生きてたですから、「もう行くな」と。退職せろということですね。しかし職を見付けようにも職がないのでテボ（籠）作りにでもなれと言われたですたい。



籠作りも一ヶ月もしたら金になるような物が出来たですたい。ちり取り、あれが一番簡単で、農家にはぜひ要るわけですよ。これはいい金になるねと言うてしりました。半年もすると、今度は当時、引き揚げ者が作るカマス工場があつちもこつちにもできて私も一年ぐらい働いたら、藁も高いからもう止めようということになった。遊んでる訳にはいかんで今度は印刷屋に入りました。沓岐で一番大きな沓岐日報という新聞社に、当時一万何千戸、郵送もあつて一万二千五百部前後ですたい、そこに十八年勤めました。そこが借金があるために給料をまともにくれんとですたい。遅配、欠配で八人の従業員が五、六年ずーと給料袋は貰うたことはなかですたい。昭和三十三年に、若手の新聞記者が入ったですな。その時から給料袋が貰えるようになったから、それが十四、五年目ですたい。月給三千円。

その前に、原爆病になりました。昭和二十年の十月に沓岐に帰りましたが、長崎の寮に在る間は八月九日から十月頃まではどうもなかつたのに、昼十二時から三時頃まで疲れて寝んばいかんとで

すね。どうしても、どうやっても病気はそんな時から出よつとですたい。三年間そのまま行つたですたい。二十一年、二十二年、二十三年、昭和二十四年頃まで続きました。本当の原爆病ですよ。原爆に遭うた人はみな吐いとるでしょう。風呂に入つたら鼻血がポタポタ出てすね、おかしいなと思つて、くしゃみが出たときには、大袈裟に言うたらこれくらいですかね、湯飲みに入るくらいの真つ黒い痰が出たですもんね。その当時は何も分からんですから、原爆病とか分からんわけですたい。

井原 今の健康状態とか、平和の尊さですすね、何とか言いながらも、この六十年間を戦争しなくすすんだ、させなかつた。そういう意味でも私達被爆者の運動というのは大切だと思ひますけれど、その辺の思ひをそれぞれ語つてください。

右往左往

辻原 私は八月九日に被爆して、その日は一晚、

死人と一緒に過ごしました。死人か生きていのかまつたく分かりません。一応前の山に逃げましたけれど、またトンネルの中に逃げ込んで、それで朝鮮人も一緒、朝鮮とか日本とかじゃないんですよ。同じ人間だから、呻き、さめきしていたのが物を言わないようになったからと思つたら、結局亡くなつていた。それも怖いという感覚が全くないですすね。一夜明けて、「生きとるものは前に出て並べ」と。そして東西南北に並んで、私は南の方に並びました。その絵を描いたのが「原爆絵図」ですすね。友の会の会館に飾つてあります。あの絵です。野越え山越えして行きました。途中、やっぱり敵機が旋回するんですよ。その度に川の中に伏せ、山の中に逃げ隠れしながら、道の草を拾ひ食べながら、何時間かかつたでしょうか、南手の家に帰つたのは夕方近くでしたね。そして家に帰つたら、屋根は吹き飛び、ガラスは散り散りに割れ、タンスは倒れ、ああこれはどうせ防空壕だろうと思つて、防空壕に行つたら、母と弟や妹たちがおりまして、「父ちゃん」と言つたら「お前の死体ば探しに、戦闘帽ば被つてゲートル

ば巻いて行ったばい」と。近所の女子挺身隊の藤野さんという人に聞きに行ったら、「トンネル工場じゃけん大丈夫じゃろうと思うばってん、その時の仕事の状態ではわからんたい」と言われて、安心してよかもんじゃろ、どうじゃろわからんやったと。でも、「ほんなこて生きて帰ってきたとか」と言つて、撫でたりさすったりしました。

そして結局、丸二日食べてないんだけど、ひもじいことよりも、親や兄弟に会えたことで。今の国宝の大浦天主堂の上に防空壕があつたんですよ。その防空壕に行ったら、母と妹、弟達がいました。父は夕方帰つてきて「結局、遺体は見つからんやっつた」と。そして「津田子、お前生きて帰ってきたとつたとか」と言つてあとはもう言葉になりませんでした。それからその翌年、突然熱が出だしたんです。七度八分、八度二分、七度六分という熱が出るんですよ。そのころ三菱病院の分院で大浦分院という病院があつたんです。父が三菱重工の社員だったから、大浦分院に行つてみるという事で、行つてみたら、風邪でもなからう、咳は？ 咳はでません。熱が昼になつたら出るとい

そのころはレントゲンもないんですよ。ましてや分院だから。それから何カ月かしてから、今の市民病院は以前は慈恵病院でした。その慈恵病院に行つて診察して貰えということで、何日かしたら「熱計表を書いてこい」と言われて、何月何日の午前中、何度何分。午後、何度何分と書いた一週間分の熱計表を持つていきました。そして胸部疾患をやられている、といつてもレントゲンがないんですよ。そのまま慈恵病院に通いながら、昼になれば熱が出る、喉が渇く。飲む水もないんですよ。そして近くに夏みかんの木があつて、母が、とにかく夏みかんを手に入れてくるからと言つて、夏みかんを貰つてきて、もうそれをむさばるように食べました。ご飯よりもその夏みかんの酸味が熱を取つてくれるのか、私はそれを食べて熱が引いたのかなと思つて、二、三年はそういう生活が続きました。それから三十一年に結婚しましたけど、子どもも異常分娩だったりして、私自身は狭心症を患つて、現在もあんまりかんばしくありません。心臓発作が時々来ます。血圧はもちろん高い。現在、心臓と血圧の薬をずっと併用

して今に続いて飲んでおります。今のような状態でございます。

被爆後の悲惨な生活

山川 私は原爆の時はお袋の元へ、子々川へ、時津町に行つて一カ月ばかりそこに置いて貰いました。そして今度は父だけをそこに置いて貰つて、私と姉と姪の三人は、こっちの西町の家に戻つてきて、破れトタン、焼けトタンを拾い集め、石垣に木をなんかけて、それに破れトタンを打ち付けて、壁になるとも全部破れトタンたいね。それを打ち付けて、雨が漏つたりするけれども土間には板、板張りの板、それを敷いて、あとは俵をその上に敷いて寝てました。それで冬になったら、その年は雪が酷かったとでもんね。それで寒くて寝られんとですたい。隙間風はどんどん入るし、地べたには寝とるし。朝起きてみたら、毛布の上には雪が積もつとつとですたい。トタンの破れから隙間風どんどん降り込んできて。そんな生活をし、

うちの山に杉の木があったもんですから、それを叔父さん達が全部寄り集まつて、兄貴が小倉から来たりなんかして応援してくれて、一応家は親せきの船大工さんに造つて貰つたんですね。瓦は、焼け瓦を拾つてきて、被せて、それで足らんところは破れトタンを張つて住んどつたです。その家に二十年くらい住んどつた。とにかくその時は食料はなく、配給も少しはありますが、満足のいく配給はなく、芋粥をすするくらいのもんじゃないです。今で言えば、地震とかでプレハブ住宅とか、全国からの援助物資が集まつて生活ができますけど、その時分はそういう状況じゃなかつたし、日本全国が物資がなかつたときですけんね、なんもなか、本場に惨めな、今で言うホームレスのような生活ですたいね。それが戦争というものです。戦争をするとそんな惨めな目に遭うと。平和な時ならすぐほいほいとプレハブでも出来て、原爆当時に比べたらよか家ですもんね。そんなに住まわれるけど、戦争の被害に遭つた時はそういうことはどこでもできん。現在、戦争をしているところがそうですもんね。だから戦争というものは絶対

したらいかん。世界全国が平和になっていかない
といかん。そのためには、武器を作つてどんどん
どんどん売りつけて、戦争をさせたらいかんとい
うことですかね。今、戦争をしようところは、
武器はなくて、油が出て、金があるだけで、よそ
から武器を買つて戦争をしようとするけんね。そ
いけん、二度とそういう惨めな生活は私達はした
くはありません。今は極楽も極楽。よかとこだら
けですもんね。あの時分は地獄以下の生活やつた
ですからね。それから病氣、私は第一期糖尿病で
すね。それで現在は右目は潰れて見えません。左
の耳も全然聞こえません。体の方は狭心症で、ペー
スメーカーを入れて、ステントも二本入れとります。
もうひとつは国の認定病になつとるんですけどサ
ルコイドーシスという病氣ももつております。こ
れを日本語で言うたら、皮膚芽と書く腫瘍ですな。
そんなのが出た原因はヘルペスですな。というの
は、皆さんは外に出るですたいね、私んとは中に
出るんです。仕事に出て、私は定年になつてから
公善社に行つておりましたから、時津の斎場の、
いわば管理人ですな。それで仕事に行つとるとき

に生汗が出て、微熱が出て、具合が悪くなつて、
お腹が痛くなつて、その時は仕事が入つてなかつ
たら、控え室で毛布を被つて寝とつた。それで一
時に仕事が終わるから、終わつて病院に行つて、
病院で薬を貰つたけど三日経つても痛みの取れん
とです。それで入院せんね、と言われて城栄町の
病院に入院しとつたら足腰立たんごととなつても
うたとですよ。それで動ききらんようになって、
そしたら大学病院から神経科の先生が来らすから
診てもらつて、とやうことで診てもらつたら、即
刻大学病院に入院しなさいと言われて、大学病院
に行く救急車に乗つたことまでは覚えとつとです
けど、あとは意識不明になつてしもうて。それで
大学病院で私の容態をうちの家内に聞いて、年か
ら年中咳をして、鼻水が出るといふやうなことを
言うたと。その前から肺のレントゲンは撮りよつ
たとですよ。そして異常はなかつたんですよ。そ
の時、大学病院に行つてみたら肺のところになんか
できとつたらしい。それで肺癌の末期と言われて、
家内は全部に言うとするわけ。そしたら、後で私が
落ち着いて、気を取り戻してちーつとばっかり分

かるようになったら、みんな来とるとすもんね、親戚とか何とか。会社のOBのものとか何とかいろいろ来とって、なぜこぎゃん来ととじやろうかな、と思うとつたら、後で聞いてみたら肺癌の末期と言われたと。九九パーセントそれだけど、あと一パーセントは違う可能性もあるので、脊髄から液を採って調べたら、ヘルペスだった。ヘルペスというのは水疱瘡らしいですね。誰でも水疱瘡に罹った人は四つくらいもつととげなですたい。それがストレスとか疲れとか、心配事とかいろいろ重なって出てくれば、それが出るらしいです。それが脳をウイルスが押さえとるから足腰立たんごととなって、それでその時、このまま植物状態だろうと言われたらしい。植物状態と言われた後で私がものが言えるようになったもんだから、先生が来て「犬、鳩、電車、バス……」て六つ言うて「これを覚えときなさい」て言われて、それで「今、どこにおりますか」て。「大病院です」「生年月日と名前と住所を言うてみなさい」て言われて、それを言うて、これならちよつとねと思われたたでしょ。そしたら今度は、動くとは車椅子じゃろ



て言われて、私が一生懸命になって起きあがる稽古をして、看護師さんに煽てもらったり、褒められたりしながら、今度は立つことになりましたもんね。ベットにつかまって、今度はベットを伝って行ったら足がかりましたから、これは動ききるばいねと思つて、ベットをぐるっと回つて、今度は人のベットを伝つて窓まで行つてみたんですけどいい。そんな時の嬉しさですね。あとは車の付いた歩行器ば持つてきとけばすぐなくなつてですたい。みんなが使うから。それで私はキャスターの付いた点滴の器具を持って、廊下を行つたり来たりして一生懸命頑張つたら、看護師さんが「頑張るねえ、山川さん。大丈夫ね」て言われて、やつとこんなになつたですよ。そいけんで、思いました。人間は諦めたらいかんなど。医者からこう言われたけん、もう駄目ばいと思つたら寝たきり、自分がこうやろうと思つて頑張れば、こんなになつてくるといふことを感じて、それで人にも言うて、とにかく人間は努力ばせんばいかと。人間は自分が一生懸命やつて努力ばせんば、病人は寝たきりになつて。病人と思つて寝てばっかりおつて

は駄目。せいけんではここにもこうして来させてもらうことができとる。朝は、外科に行きよつとでもんね。腰。大学病院では泌尿科、皮膚科、眼科、耳鼻科と心臓と五つ行きよるわけです。もう大学病院にまとめてしようたです。腰だけは別で。

井原 原爆症の認定の手続きはしたことがありますか。医者に相談してみたら。

山川 大学病院で言うたら「そうねえ」て言うたばってん。せいけんでは原爆病院に行ったらどがんやろうかと思うとつとですよ。

井原 友の会でも呼びかけてみましょう。

中村 それは私があるんですよ。二十五歳のときに子宮、卵巣を取って、そしてまた十年後に卵巣腫瘍でして、それから白血球が上昇する。そして先生が「中村さん、やっぱり原爆の後遺症のあるとよね」ておっしゃったけど、ああそうですか。済ませていたんですけど、その後諸々の書類を集めて、国に出してみようかなと思つて出したんですよ、市を通じてね。そしたら一年もかからんやつたかな、却下で返つてきたんですよ。あなたの病

気は今が該当いたしません、ということでも返つてきたんですよ。その当時は、私は甲状腺の病気がまだなかったんですよ。書類を出した三カ月後に、原爆病院のほうから、甲状腺の疑いがあるという事で連絡があつて、それからずっといまだに甲状腺の治療を続けているんですよ。そして結局、キロ数もあの頃は一・何キロでしたでしょ、そして入市被爆がなかったでしょ。その後そういうのがずっと変わつてきて、私の場合は、申請しやすいような状況が出来てきているんですよ。

原水爆禁止と平和運動

井原 これは他の会員の皆さんにも呼びかけて、対象疾病になつている人もいますから。距離も三・五キロという一応の目安も付けてますけど…。
中村 ですから、そんな方がいるんじゃないかと思ひますけど。

井原 いると思ひますよ。

山川 私は胆石も言われたし、脱腸も両方やつと

るし、白内障の手術を受けたとき、家内の親から「米雄、お前さんな、よう手術に適たもんね」て言われたですもんね。

井原 私達も原爆という悲惨な目に遭ったわけですけど、今はこうして元気に生きていることが出来てますが、この間、いろんな被爆者の団体の皆さんと連携を取りながら、政治を動かしたりして、医療費を無料にしたり、健康管理の手当てを新設したりというようなことも、ずっと運動を続けてきたからです。今後ともこれは決して緩めてはならない。そうしないと、今の政府の状況ではいつ何時改悪されるか分からないという恐れがあります。もちろんこれは、平和をずっと維持していくということに繋がっているわけです。二度と原爆を使わせてはいけないということだと思いますが、そういう点で、戦争のことについては何回も語り尽くされているようですけれども、私達友の会としても、そういう運動の先頭に立つて行かなくてはならないと思っていますので、特にそういう点について思いがあれば皆さん一言ずつでもしゃべっていただければと思います。



山川 私は現在の医学の発達で、命を支えられて来とるから、最後の奉仕にと思つて献体を申し込んでいるんです。献体をして私のようなこんな病気もよう調べて貰うて、次の人がもしもこういう病気になるた場合には役立てて貰おうかと思つて、それで献体までお願いしとるんです。

坂口 だいたい私の会社はほとんど亡くなっております。茂里町やったですけんね。中心地が近かったですから。私はおばさんのところに行つてから、湯飲み一杯ぐらい吐いたとですよ。吐いた品物が真つ黒かつちゃんな。それから一年ばかり火傷で仕事も何も出来なかつてです。

井原 ぶらぶら病と言われたりなんかして、だるさ、倦怠感とか私の兄貴も何とも言えない身の置き処がないようなことが何年かありましたよ。**坂口** 私は甲種合格で健康体やったですもんね。

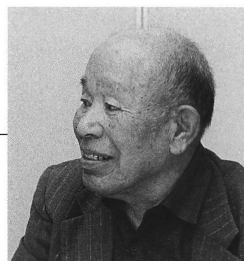
それでこんなに長生きしとるとやろうと思つてです。**辻原** それでも原爆でなくなつた人を私も直接見ましたけれど、やはり黒い血を吐いて上げながら、鼻からとか口からとか出しながら亡くなつていきましたもんね。

山川 煤とか何か吸い込んでいますから、黒か雨の降ったというのはそれでもんね。

坂口 私の親が九十九歳で亡くなったとですよ。ね。養老院に行かんとなら百歳まで生きられたと思ってる。環境も食べ物も違ったのがよくなかったと思ってる。子供もある程度親に似るじゃないですか。私が長生きするのも、だいたい私は親に似とつとじゃなからうかと思えます。今八十三歳、大正十四年ですから、親ほどは生きられるかなと思つとつとです。

中村 今は健康管理のお金を頂くから、私はその管理費を無かもんにして、それは自分に効くか効かんか分からんけどね、私も病気をいろいろ持っていますから、五種類か六種類、ちようど月に二万四、五千円払いますよ。栄養食をね。そんなとで補っているんですよ。病院は病院でかかってますけれどね。

山川 私は私の父と同じ時期にここが腫れたですよ。リンパ腺ですかね。二人とも同じ時期に腫れて、その時は病院に掛かれないうでしょう、そしてここから真つ赤になつて、それが今度は化膿し



たどが自然に破れて、二人とも。今思えばそのとき毒が出たとじゃなかでしようかね。それが二人とも同じ時期に出来て腫れて、それが出てしもうて、それで毒が出てしもうて長生きするのかなと、そげん考えももつております。

井原 そういったことも医学的に解明してもらいたいものです。

永元 もう一つ、ききたい。入院したら、手帳を持つていても食事代とベッド代は取られるそうです。

井原 部屋代と食事代が一部負担になっています。
永元 私達は入院しておらんもんだから全然知らんやつた。

山川 家内が入院して五千円取られましたけどね。
坂口 三年前は入院しても部屋代も食代も一銭もとられんやつた。

山川 徳州会に入院しているときはおしめ代はかかりよつたとです。富士見町の緑病院に入院したらおしめ代は取らんとです。ただ食事代とベッド代ですかね、五万円。

井原 今度四月一日に発足した「後期高齢者医療

「制度」というのがあまりにも評判が悪いので、「長寿医療制度」に名前を変えたとか言っておりますけれど、いずれにしてもこの制度に入らないといけませんから保険料は払わなければなりません。原爆手帳を持っていても入らないといけません。ただ治療費の個人負担が公費で支出されるということですから「制度」には、強制的に加入させられるのです。

今後とも私達は命の続く限り、原爆の被害をうけることのないよう、平和運動を怠らず、後世にもそのことを伝えて参りましょう。



長崎県動員学徒犠牲者の会 長崎県被爆者手帳友の会 主な歩み

年月日

国会陳情

主なできごと

長崎市農民会館の一隅にささやかな会、長崎県動員学徒犠牲者の会の発足
県青少年センターにおいて、長崎県動員学徒犠牲者の会員が主体となって被爆者手帳友の会の発足式

生き残りたる吾等集ひての発行

安日 晋先生（長崎原爆病院）のご遺徳を偲び被爆者手帳友の会が建立した記念碑
「長崎の鐘」除幕式（平和公園六〇〇名参加）

西有家被爆者慰霊碑

特養ホーム「かめだけ」起工式

千々石原爆慰霊碑落成式

特養ホーム「かめだけ」落成式

ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー（特養ホーム「かめだけ」）

創立十五周年記念（功労者表彰・記念祝賀会・タイムカプセル・その他）

南串山原爆殉難者の碑

島原原爆殉難者の碑

長崎県から優良団体の表彰を受ける

ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー（特養ホーム「かめだけ」）

ソ連観光客の原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」慰問

わが戦いの日々

の発行

昭和32年11月10日 二回
42年6月18日 二回
43年 一回
44年 二回
45年 七回
46年 六回
47年11月30日 四回
48年 九回
49年 六回
50年 九回
51年8月7日 五回
52年8月5日 十一回
53年3月7日 八回
54年3月26日 八回
54年12月8日 八回
55年5月11日 六回
55年8月5日 六回
56年12月14日 八回
57年4月10日 三回
57年5月30日 三回
57年11月14日 二回
57年11月23日 二回
58年12月24日 二回
59年11月19日 四回
60年8月8日 五回
61年 三回
62年5月16日 三回
63年8月9日 五回

友の会創立二十周年記念祝賀会 宝来軒別館
長崎の鐘 第二号（ソ連邦・レニングラード市）贈呈式

長崎県被爆者手帳友の会 四十周年記念 被爆者証言集

閃光せんこうのあの日から

平成二十年六月十八日発行

発行

長崎県被爆者手帳友の会

〒八五二一八一六 長崎市平和町八番四号

電話(〇九五) 八四九一四九四

印刷

株式会社 昭和堂 長崎支店

〒八五〇一〇八七五 長崎市栄町六一二三

電話(〇九五) 八二一一二三四

